

あとがき

第5回日本Neurogastroenterology(神経消化器病)学会は、平成18年10月10日に札幌にて、東北大学大学院医学系研究科行動医学分野 福土審教授のもと開かれた。早朝から内科医、精神神経科医、薬理・薬学研究者ら100名近くが札幌市のきょうさいサロンに集まり、活気ある討論を重ねた。特に、昨年4月に本領域の中心疾患である機能性胃腸症(functional gastrointestinal disorders ; FGID)に関するRomeⅢ報告がGastroenterology誌に掲載され、今回の学会会長の福土教授と本学会の理事である国立病院機構さいがた病院 松枝啓院長がその委員会委員として活躍されたことは、ご本人の卓越した才覚ゆえとは言え、わが国の神経消化器領域の臨床・基礎研究が国際的に認知されたことを示すものであって、学会にとっては大変喜ばしいことであった。

さらに、今回の学会にはRomeⅢ委員会の委員長であったノースカロライナ大学 Douglas A.Drossman教授が招聘され、委員会の討議内容を詳細に報告いただいたことは日本の医師・研究者にとって大変有難いことであった。さらに有益であったのは、RomeⅢ委員会報告の日本語訳を担当している本学会副理事長の東北大学医学部総合診療部 本郷道夫教授が、ランチョンセミナーで対訳の問題点を述べつつ、FGIDが示す複雑な症状のニュアンスを的確に語ってくれたことであった。

FGIDを有する患者さんは欧米のみならずわが国でも多数みられ、日々の悩みのために生活の質(QOL)を著しく落としている。一般の臨床医も本疾患の存在を認識し、患者の訴える腹部症状に耳を貸し、彼らのQOL向上に資する医療を推進することが、患者ニーズに対応する全人的医療と考えられる。本学会proceedingsが消化器内科が専門でない一般医師の日常臨床においても役立つことを祈る。最後に、本学会のproceedingsを学術定期雑誌「消化管運動—目にみえない消化器疾患を追う」に掲載いただいた大日本住友製薬株式会社に深甚なる謝意を表したい。

編集主幹 佐藤 信紘